

2026 年度口語詩句奨学金の選考では、書き手の層が、これまで以上に厚くなったという印象を受けた。それにともない、ジャンルを超えた様々な作品が見られるようになった。そして全体の印象だけども、応募制限から来る口語表現ならではの良さや、行替え、かな表記、オノマトペなど、おのおのが様々な表現にチャレンジしている様子がかがえた。それは、とても喜ばしいことだと思うけれど、思うところを少しだけ伝えておきたい。

まず口語詩句への応募は、インターネットにおける投稿が基礎になっているので、作品の入選の可否はひとつの作品ごとに決まる。でも、奨学生の選考は、書き手の全作品を見たうえで判断するので、入選の作品数が多くても、奨学生の対象からははずすこともあるし、入選数は少なくとも奨学生に推すこともある。つまり、単体の作品では、いいと思うものがあったとしても、応募の全作品を見て、書き手として一定の水準に達していないと判断した場合は、選考外になるということが起こる。逆に、単体の作品ではあまり大きな印象を残さなくても、連作として書き手のしたいことや、表現したいものが明確に感じ取れるような場合は、そちらが選考に残る場合もある。短詩、短歌、俳句等では、作品自体が短いので、どうしてもこういうことが生じる。また、当然、選考委員によっても評価の基準は異なる。ジャンルを横断した、それぞれの書き手が選考をしているので、とりわけそれは顕著になる。すぐれた書き手が、複数の選考委員から評価を得ると同じ程度に、わずかな選考委員だけが、まだ見ぬ新たな書き手を見出すといったことも起こるのではないかと思う。

だからこそ、みなさんには選の可否だけにとらわれることなく、自身の表現したいものをつきつめてほしい。字数制限だけで、ジャンルの制限のない、ネットによる投稿なので、応募のしやすさはあるかもしれないけれども、逆にそれが表現の足かせにならないようにと思う。それともうひとつ。書くジャンルは自由だし、複数のジャンルで活躍する書き手も多くいる。でも、自身の書く形式において、その方法でしか表現できないものを、ぜひつきつめてほしい。書くことが幸せとは限らないし、書かないことが幸せとも限らない。ただ、そのあたりまえの地平で、それでも書きつづけることは間違いじゃない。なんの根拠もなく、ただリングに立ち続けることになるかもしれないけれども、それはかっこわるいことじゃない。たぶん僕もそんな場所にいる。

最後になったけれど、惹かれた作品をいくつか紹介して、この選評の締めくくりにした。あらためて、これらの作品に出会えたことを幸せに思う。

生きてゆく事とは好きを増やす事
こんなにきれいだったかな、雪

金光 舞

うんていがうまい友達 古い雪

高田皓輔

レシートをまっすぐ折って花曇

ムクロジ

青春の死因
を
語る窓にいて
ぼうくうごうの昏がりがる

さいう

冬の朝
あなたの母語の音階で
少しふくらむわたしの名前

川上 真央

すべりひゆ悲しい音のする楽器

大西 美優

右手にふれてつめたい左手

上原一樹